

育成だより 第115号

【発行】 大刀洗町青少年育成町民会議 TEL 77-2670 FAX 77-2760

【編集】 大刀洗町青少年育成町民会議広報委員会

令和4年度 大刀洗町青少年育成町民会議の取組み

主な取組みは4つです。

「少年の主張大会」 私からのメッセージ (敬称略)

令和4年11月12日(土)

中学生の部			
大刀洗中学校	1年	田中	志彩
	2年	近藤	芹那
	3年	江藤	依知花
小学生の部			
大刀洗小学校	6年	平田	一陽
菊池小学校	6年	後藤	愛結
同	6年	中島	海依
本郷小学校	6年	和田	悠生
同	6年	正木	愛心
大堰小学校	6年	田中	桜



【(2)～(10)ページに全文掲載】

各校区民会議の事業紹介

- ◆大刀洗校区民会議「ふれあいハイキング」
- ◆菊池校区民会議「芋掘りを楽しむ」
- ◆本郷校区民会議「地域と学校、つながる楽しさ」
- ◆大堰校区民会議「ふれあいウォーキング大会」

【(11)～(12)ページに掲載】

「家庭の日」推進共同事業 中央公民館講座「親子を楽しむ!まなビィ講座」とのコラボレーション企画

第1回「真夏の夜の大冒険?夜のドリームセンター体験」

令和4年7月23日(土)

第2回「たまには親子でボードゲームしよっか!」

令和4年8月11日(木)

第3回「リバーカヤックと木工体験」

令和4年9月11日(日)

第4回「親子で楽しく!多肉植物 はじめての寄せ植え」

令和4年10月22日(土)

第5回「食べて学ぶ!チョコレートのお話」

令和4年12月18日(日)



【(13)～(16)ページに内容を掲載】

少年の主張大会

～私からのメッセージ～ 中学生の部



たくさんのやさしさを

大刀洗中学校
一年 田中 志彩

みなさんは、誰かにやさしくしてもらった経験はありますか。経験がないと思っっている人でも、気づいていないだけで、そんなやさしさが身の回りにたくさんあるかもしれない。私も、あまりないと思っていました。あることをきっかけに、気づくことができました。

私は、小学校四年生までは、毎日元気に登校していました。元気に走り回り、生活の中で困ったことは特にありませんでした。それが、五年生の終わりごろ、走るのが遅くなったり、すぐに疲れたり、簡単に出来ていたことが出来なくなったりと、体に異変を感じるようになり、病院で調べた結果、ある病気だということがわかりました。その影響で、長い距離を歩いたり、走ったりできなくなりまし

た。六年生の社会の授業で、町を見て回る時間がありました。長い距離を歩けない私は、車いすを使って行くことになりました。たくさんの友達が「おすよー」と言い、みんなで交代しながらおしてくれました。この他にも、学校生活の中のいろいろな場面で、周りのみんなから、「大丈夫？」と、声をかけられるようになりました。とてもうれしかったです。体調

が悪いときがたくさん続いたけれど、周りの友達のおかげで、気持ちのよい学校生活を送ることができました。このような経験から私は、人のやさしさに気づくことができました。そしてしばらくすると、逆のことについて考えるようになりました。つまり、自分が周りの人にやさしくするということです。例えば、こういうことがありました。ある日の部活での出来事です。ものを運んでいるとき、大変そうにしている人がいました。今までの自分だったら、代わりに持つてあげたら自分も大変になつてしまうからやめておこうと思つていたかもしれない。ですが、みんなにやさしくしてもらつた経験を通して、少し持つてあげようと思えました。そしてその人に、「ありがとう」と言われ、私もうれしい気持ちになりま

した。これ以降さまざまな場面で、人に対してやさしく接することが増えました。その中には、今までに気づくことのなかった、小さなやさしさがたくさんありました。いきなり大きなことはできないけれど、このように小さなことから始めていき、やさしさを増し、たくさんの人を笑顔にしていきたいと思いました。

この経験から私は、やさしくしてもらうだけではなく、逆に自分も、困っている人や、大変な思いをしている人がいたら、自分に出ることをし、他の人にやさしく接していくことで、自分もみんなも、幸せに生活できると考えます。これからみんな、たくさんのやさしさや、「ありがとう」の言葉を増やしていきたいでしょう。





昔の話に 興味を持つということ

大刀洗中学校
二年 近藤 芹那

みなさんは、おじいさんやおばあさんに昔の話を聞いたことがありますか。私は兄と祖父が隣でしている昔の話をテレビを見ながら時々聞く程度でした。当時の私は、

「昔の話なんてつまらない。なんで昔の事を考えんといかんと。」

と思っていました。しかし、私の考えは変わりました。

それは、この主張文のテーマを考えているときです。私は、最初主張文のテーマを「戦争」としていました。そこで、日本も参加していた戦争のことを書こうと思い、父や兄に祖父が話していた戦争中に体験したことを聞きました。

祖父は、航空兵を養成する学生に志願していました。持病のためなれませんでした。祖父を合わせて四人が志願していました。一緒に志願していた仲間の三人は特攻隊となり亡くなりました。そして祖父は、戦闘機などを製造する工場で終戦を迎えまし

た。祖父は自分だけ戦争に行けなかったことを悔やんでいたそうです。この話をするとき、祖父はいつも笑顔でした。私は、「辛かった思い出だと思うのになぜ祖父は笑顔で話していたのか。」

と疑問に思っていました。母に聞くと、「昔の話を興味を持ってくれたことが嬉しかったんじゃない。」

と言っていました。父や兄から祖父の話を聞いて気になることがたくさん出てきました。

しかし、父と兄も祖父の話を聞いたのは数年前でうろ覚えだということもあり、どうい生活をしていたのかなど知ることができませんでした。それから私は

「祖父の話をしっかり聞いとけば良かった。」と悔やみました。なので、今は父と兄が昔の話などをしているときはしっかりと聞いて、気になったことはすぐ聞くようにしています。

私は、これらのことを通して、昔の話を興味を持つということとは、ただ昔はどのような生活をしていたのか知ることだけではないと思いました。昔してしまったことをこれから二度と起こさないようにするのと、昔の人の知恵を知り、これからの生活に取り込んで

いき、未来をより住みやすくすることだと私は思いました。

私は、これから私達に戦時中に起こった事や昔の暮らしを伝えてきてくれた方に感謝をし、その話を未来に役立てていきたいなと思いました。



小さな勇氣

大刀洗中学校
三年 江藤 依知花

みなさんは、ボランティアや地域の方々と触れ合う会などに参加したことはありませんか。

私は、一・二年生の途中まで一度も行ったことがありませんでした。しかし、あることがきっかけで私は積極的にボランティアや地域の方々と触れ合う会などに参加するようになりました。

私が一・二年生の時はコロナウィルスの影響でボランティアの募集が少なかったということもあり一度もボランティアに参加したことがありませんでした。私が二年生の時に先生から

「ワークショップという沢山の人が集まって話し合う会に参加してみないか。」

という誘いが来ました。私はこの会の事を聞いて、「知らない人と話をして盛り上がるのかな」「今までボランティアなどに行つたことないけど大丈夫なのかな」と言う不安な気持ちがあり、行こうかとても迷いました。

しかし、「行つてみたら何か変わるかもしれない」と思い行くことにしました。当日、私はとても不安な気持ちがあつたため正直、行く気がありませんでした。いざ会場の中に入つてみるとたくさんの大人の方がいて一気に緊張しました。一緒に来ていた私の友達も、地域の方との仲がよかつたためすぐなじみ地域の方と話していました。私も席につき同じテーブルになつた人に一言あいさつをしただけでなかなか会が始まるまで会話が進みませんでした。「ここから三時間大丈夫かな」という不安な気持ちに襲われましたが、その気持ちはすぐなくなりました。なぜなら、私が自己紹介をしている時、同じテーブルの人たちが笑顔であいづちをとりながら聞いてくれたからです。この時、緊張はほぐれ、地域の方の温かさを感じました。今回

のワークショップでは、「なぜ勉強をするのか」というお題で話し合いが行われました。意見交流する時、緊張はしていませんでした。「周りの人達は大人」という意志が強く遠慮してしまい固まっていました。隣に居た大學生がそんな私に気づき、

「何かいい意見ある？」

と話を振つてくれました。勇気を出して意見をいうと周りの人たちは、

「その意見、とてもいいね。」

「とても素晴らしい意見ですね。」

と言つてくれました。このことがきっかけで私は、自信を持つことができた。皆さんの意見を出すことができました。その結果、会場に居た方々ととても仲よくなれました。特に、隣に居た大學生と仲よくなることができ、無事にワークショップを終えることができました。

終わつた時、今までとは違う自分に出会えた気持ちになり、「また来たい」と思いました。そして私が帰る時まで仲よくなつた大學生と学校生活のことなどを話していました。帰る時間になり、別れを告げた時に大學生が、

「今日は、ありがとうございます。また次の機会があれば会いましょう。これから頑張つてね。」

と言つてくれました。この瞬間、私はとても嬉しい気持ちになりました。そして、この気持ちと同時に興味のなかつたものに目を向けてみることに、小さな勇気を出して行動してみることの大切さに気づくことができました。

その結果、新しい自分に出会うことができるかもしれないし、違う考えを持つことができるかもしれません。その後私は、「自分には無理だろう」と思っていたものにも勇気を出しチャレンジするようになり、ボランティア活動にも予定が無い時は必ず行くようになりました。

ここでみなさんに伝えたいことは、小さな勇気を行動に移すことで自分にできるものの可能性を広げることができるということです。私もこのワークショップを通して、「私はこんなことができるんだ」という新しい発見をすることができました。「一回だけでもいいからしてみようかな」というチャレンジ精神がとても大切です。みなさんもぜひ一度、ボランティア活動や地域の人と触れ合う会などに参加してみてください。

少年の主張大会

〜私からのメッセージ〜 小学生の部



『ちがう』を認める

大刀洗小学校

六年 平田 一陽

ぼくは、ラグビーをしています。みなさんは、ラグビーというスポーツにどんな印象をもっていますか？”体が大きくて強そうな人達がぶつかり合うスポーツ”という印象ではないでしょうか？しかし、中にはスクラムハーフという、攻撃のリズムを作るポジションの人がいて、体が小さく動きの速い人も活躍しています。それぞれの『ちがう』強みを認め、生かし合って一つになるスポーツです。

ですが、実生活のぼくは、『ちがう』ことを認めることがなかなかできませんでした。

例えば、授業中に、友達が「こうじゃない？」と出した考えに、「いや違うでしょ」と、すぐに否定し、自分の考えをぶつけてしまうのです。相手が家族でもそうです。親子で標準語作りに取り組んだ時、母が「こうすればいいんじゃない？」と改善案を出してくれるのに、認めようとせず、「いやこっちがいい」と、最後まで自分の考えを変えられないのです。そういう時は、自分は満足していましたが、相手と一緒に達成感を味わうというような喜びはありませんでした。

ある日、道徳の授業で、自分の短所について考えました。ぼくは、自分自身の会話の仕方にハツとし、『ちがう』を認めきれない所が自分の短所だと気付き、変わりたいと思うようになりました。

そんな時、総合の学習で新聞づくりをしました。班のみんなと記事の内容を話し合っていると、ぼくが出した意見に対して、友達が「なるほど、それいいね。」

と言って認めてくれました。ぼくは、とてもいい気持ちになりました。そして、ぼく自身も友達の意見に対して、「それもいいね。」

と、自然に言うことができました。「なるほど」「いいね」そんな心地よい会話のやり取りを繰り返しながら、みんなが納得できる新聞を作り上げ、みんなで達成感を味わうことができました。この経験から、互いに認め合うことで物事がうまくいき、喜びも大きくなるということを実感しました。

改めて「認める」という言葉を辞書で調べると、「確かにそうだと受け入れる」とありました。大事なのは、自分の中に受け入れることで、それは考えを押しついたり、無理矢理変えさせたりすることではないと分かりました。ぼくは、『ちがう』こともまずはそのまま認めることが大切なのだと思えるようになりました。

では、いろいろ、さまざま、それぞれの、『ちがう』を認めることができる自分になるためにはどうすればよいのでしょうか。ぼくは、二つのことをやってみようと考えました。一つは、口ぐせである「いや…」で始めてしまう受け答えを、「なるほど…」に変えていくことです。二つは、友達の輪を広げ、自分とは『ちがう』見方や考え方に触れ、吸収していくことです。

ぼくの学級を見渡してみると、勉強が得意な人、運動が得意な人、話すのが得意な人など、強みはそれぞれです。「運動会の応援歌はあれがいいこれがいい…」感じ方も考え方も様々です。みんながそうした『ちがう』を認

め、生かし合えば、きつとチームのような学級になれると思います。そして、スクラムハーフのように、ぼくが、互いを認め合う会話のリズムを作れる人になりたいです。



男だから女だから？ 私は私

菊池小学校
六年 後藤 愛結

みなさんは、「男のくせに、女のくせに」と言われたことはありませんか。私は、「女のくせに力が強い。」

と言われて嫌な気持ちになったことがあります。どうして、女の人の方が強いといけなのかと疑問に思いました。

そんな時、公園に行くと「パープルリボン」という運動のポスターが目につきました。私は、ガールスカウトの仲間とその運動について話し、一緒にパープルリボンの活動について調べていきました。パープルリボン運動とは、子どもや女性に対する暴力のない世界を目指す運動で、いろいろな国で啓発活動をしている運動です。調べる中で「女だから」という性別による差別をされて苦しんでいる

人や、暴力を受けて苦しんでいる人のことを知り、私はとても心を痛めました。

そこで、私達にも何かできることはないかを考え、「パープルリボン大作戦」というプロジェクトを始めることにしました。これまでに調べたことや、看護師さんから話を聞いたことをもとに、メッセージカードやポスター、紫色のヘアピンなどを作成しました。さらに、ジェンダー平等をテーマにしたワークショップを企画し、私達の活動を報告しました。そして、来場した方々に手作りのメッセージカードやヘアピンを配布しました。この活動は、久留米市男女平等推進センターの広報誌に大きく取り上げていただき、たくさんの方にパープルリボンの活動が伝わり、とても嬉しく思いました。

私達は、これからもパープルリボンについて伝えていくために、現在絵本を作成しています。絵本が完成したら読み聞かせ活動を行い、もっと多くの人にパープルリボン運動について知ってほしいと思っています。

現在、世界中でSDGsの取組が行われています。その五番目の目標が、「ジェンダー平等を実現しよう」です。世界には、女性だけ

らという理由で教育を受けられなかったり、仕事ができなかったりする人がたくさんいます。性別に関わらず、一人の人間としての可能性や能力を広げることが大切だと思います。

私達が行っているパープルリボン運動も、「ジェンダー平等」の目標を達成するための第一歩になってくれたらいいと思います。

「男だから」「女だから」その言葉で傷つく人はたくさんいます。性別で区別するのではなく、誰もが平等に生活し、誰もが認め合えるような世の中になってほしいと思います。今、小学校では、トイレのマークやスリッパが統一されている所が増えてきました。また中学校や高校でも制服が選べるようになったり、制服を廃止したりする学校が増えていくそうです。このように、少しずつですが、世の中も「ジェンダー平等の実現」に向けて、変わってきています。「男だから、女だから」ではなく、「私は私」としてこれからも生活していきたいです。みなさんも、自分にできることから始めてみませんか？



人と人をつなぐ

菊池小学校
六年 中島 海依

みなさんは、日頃から朝の「挨拶」をしていますか。人によつては、「挨拶しなさいって言われるからしないといけない。」とか「朝は、きついからなくてもいいや。」と思つている人もいいのではないのでしょうか。以前、私も「めんどくさい」と考えているときがありました。その思いが間違いだつたと気付いたのは、高学年になつてからです。

私は、高学年になり、「めんどくさい」という気持ちのまま挨拶をしていて、本当にいいのだろうかと考えるようになりました。そんな時、先生から、

「漢字には一つ一つ意味がある。」

と聞いた私は、挨拶の漢字の意味について調べることになりました。挨拶の「挨」は、相手の心を開くということ、「拶」は、相手の心に近づくことという意味でした。私は、「挨拶」についてもっと知りたい。よい取組はないのだろうかと思うようになりました。五年生になり、挨拶運動に取り組む計画集会委員会に入ることになりました。

ました。

計画集会委員会では、校門や児童玄関の前に立ち、登校してきた全校児童に「おはようございます。」と挨拶をする取組を行っています。コロナ禍でマスクを一日中しているため、表情が伝わりにくかつたのですが、声に出して挨拶をすることで、相手も自然と笑顔になつて、全校児童が挨拶を返してくれるようになりました。

「気持ちがいいな。挨拶運動をして、本当に良かった。」

と、心から思いました。

そして、その活動の中から、挨拶の効果を見つけることができました。挨拶の効果、それは、「した側もされた側も相手に元氣と笑顔を与え、人と人をつなぐ」ということです。

私は、もつともつと挨拶を広げていきたいと思ひ、学校内だけでなく、地域の方や初めて会つた人にも挨拶をしていこうと心に決めて行動しました。

ある日、習い事のとときに、初めて会う子がいきました。私はどきどきしましたが、自分から挨拶をしました。すると、おたがいに緊張がほぐれて話はずみ、少しずつ仲良くなることができました。その子とは今も仲良しです。挨拶

から始まる人間関係もあるのだなと思ひました。人は支え合つて生きています。人とつながらない人生なんてないのです。

私は、このような経験から、挨拶は「人と人をつなぐ」重要な役割をしていることが分かりました。挨拶は、とても深く価値あるものです。日本の挨拶の言葉は、たくさんあります。「こんにちは。」「いただきます。」「ただけではなく、「ありがとう。」「やごめん。」も挨拶の一つです。全て共通していることは、おたがいに歩み寄つていくことができるということです。私は、これから先も、いろんな人と関わりつながつていくために、挨拶を大事にしていきます。みなさんも、まずは朝の挨拶から始めて、気持ちの良い一日のスタートをきり、人とつながる人生を送ってみませんか。





『自分らしさ』を大切にするために

本郷小学校
六年 和田 悠生

ぼくが考える明るい社会。それは、「自分らしさ」を大切にできる社会です。

運動が得意な人、不得意な人。自分の考えをはつきり言える人、言えない人。つい怒ってしまう人、優しい人。社会にはいろいろな人がいます。そして、みんなそれぞれにちがいがああります。このような人達に対して、ぼくは、その人に合わせて関わることが大切ではないかと思っています。

ぼくは、人とコミュニケーションをとることが苦手です。四年生の終わり、A君がぼくに話しかけてくれ、少しずつ話ができるようになりました。そして、A君と趣味が同じであることがわかり、「友達」になれたのです。ぼくは、やつと友達ができて嬉しかったし、友達と会話することに自信ができました。また、別の友達をつくる勇氣をもらうことができました。ぼくを友達として関わってくれたA君がいたからです。今、「友達」の輪はどんどん大きくなっています。

五年生の時に、「LGBTQ」についての学習がありました。初めて聞く内容が多く、いろいろな人がいることをしりました。そして、「男らしさ」や「女らしさ」で決めつけるおかしさを学ぶことができました。性別関係なく、好きなものをみたり買ったりしてもいいことや、好きな色、好きな格好を、身につけて過ごすことも、その人の自由であることが分かりました。だから、好きな色、好きな服装などは、「自分らしさ」なので、認め合いたいと思います。

一人一人がもっている「自分らしさ」を大切にするためには、相手の立場になって考えることが必要だと思います。そうすることで、相手は今どう思っている、どういうことを話してほしいのかを考え、行動することができず。でも、時には、この判断を間違えて失敗することがあるかもしれません。しかし、その人に関わる前に相手の立場になってみた方が絶対いいと思います。相手も気持ちよく自分自身も気持ちよく生活できると思いませんか。

「自分らしさ」を大切にするためには、相手の立場になって考えること。

ぼくは、ぼくの「自分らしさ」を認め、自信をもって行動していきたい。そして、ぼくの周りの友達も自信がもてるように接することを、がんばっていきたい。



助け合いと笑顔でつながろう

本郷小学校
六年 正木 愛心

私が考える明るい社会。それは、人と人が助け合う社会です。

私は、五年前の九州北部豪雨災害の時に、助け合いの力を感じました。私の祖父の実家が杷木にあります。そこに住む伯父と一週間連絡が取れなくなり、家族はとても心配しました。やつと連絡が取れ、伯父と家は無事であることが分かりました。しかし、近所の家は流され、とても大変な状況だと聞きました。祖父は、杷木に手伝いに行きました。戻って来た祖父の話では、「ありがとう」と何度も感謝の言葉をもらい、優しい笑顔が返ってきたそうです。私は、ニュースで川に浸かっている町、泥でいっぱいの子の様子を見て、とても大変でつらそうだと思います。でも、

祖父の話聞いて、苦しい時助けてもらえる
と、人は大変な時でも笑顔になると知りま
した。助け合いは、笑顔を生み出し、勇気を
与えるものだと思いました。

私達、本郷小学校では、みんなでドッジ
ボールラリーに取り組んでいます。私が五年
生の時、ドッジボールラリーのキャッチがう
まくできず、チームの回数が少なくて迷惑
をかけていると思い悩んでいました。その悩
みを母に打ち明けると、インドの言葉を教え
てくれました。「人は人に迷惑をかけて生き
ているのだから、人のことも許してあげな
さい。」私は、この言葉を聞き、人は助け合っ
て生きていくのだから、お互い様の心が大切だ
と考えました。その言葉と出会い、私は、今は
上手にできなくても練習をすればいいと思
うようになりました。そして、父とたくさん
練習し、父が投げるボールを取ることができ
るようになりました。その時、「うまくできな
い」「迷惑をかける」と思っても、周りにいる
家族、友達の力を借りて諦めず練習に取り
組めばいいんだと思いました。これも、助け
合いから始まった成功だと思えます。

このインドの考え方は、差別する心もなく

せると思えます。なぜなら、うまくできない
人も迷惑をかける人も、仲間から外そうとい
う気持ちがなくなるからです。私は、心配な
時や怖い時に優しい気持ちがなくなりませ
す。しかし、友達や家族に助けてもらったり、優
しくしてもらったりすると、安心できます。
そして、私も人のために行動したいという気
持ちはわいてきます。

今の私にできること、それは、身近な人を
助けることです。友達の行動や表情を気を付
けて見ると、「助けて」のサインがわかりま
す。また、「助けて」のサインが出せない友達
がいる時は、優しく声をかけ励ますこともで
きます。そうすることで、助け合いの輪が広
がり、自分、そして周りの人が安心して生き
やすい教室・学校となると思いませんか。

父と母は、小学校の頃の話をしてくれま
す。小学校の頃、失敗したり嫌だったりした
ことも友達がいるから乗り越えた話も聞き
ました。私は、やっぱり友達がいるっていいな
と思います。だからこそ、昔も今も変わらず、
助け合いの心が必要です。私は、助け合いの
心を持ち、周りの人を笑顔にしていきたいです。



変化した生活から 見えてきたもの

大堰小学校
六年 田中 桜

「ただいま、修学旅行から帰ってきました。」
私たち大堰小学校の六年生が長崎に修学旅
行に行ったのは、九月二十九日と三十日。

二週間前から、家族で体温を測り、体調管
理に気をつけ、全員無事に修学旅行に行くこ
とができました。みんなと一緒に活動するこ
とは、ずっと、当たり前だと思っていたのですが、
今回の修学旅行に行くまで、家族も、先生方
も、私たちも、それぞれ気をつけて過ごしまし
た。そして、みんなで協力し、充実した修学旅
行になりました。この三年間、行動を制限され
ながらも、友達とのつながりを求めながら過
ごしてきた私たちだからこそ、お互いのつなが
りを深める修学旅行を成功させることができ
たのだと思っています。

二十十九年十二月、新型コロナウイルスが
発生し、それがだんだんと広がっていくうち
に、私の中で不安な気持ちが出てきました。

学校での学習も、自宅でタブレットを使うこ
とが多くなり、みんなの顔が見られない、話が

できないなど、これまでできていたことをがまんしなければならぬことが増えてきました。

学校へ行くようになってからも、友達と話すことで、うつしたり、うつされたりしないかと心配でした。マスクで友達の口や表情がわからず、何を考えているのか、どんな気持ちなのか、わかりにくく、だんだんとストレスがたまっていくこともありました。

学校に来たら、必ず友達に会って、何気なく話したり、おもしろいことを言ったり、わらったり、大きな声で遊んでみたり…。

それが、急にできなくなったことが、とても悲しく寂しかったです。生活が変化し、友達とつながる生活が、当たり前ではなかったことに初めて気づきました。

しかし、人との繋がりが減ったこの三年間、工夫によって達成できたことも経験しました。それは、運動会です。四年生、五年生の時は二年生ごとに競技を行い、ペランダから応援しました。

そして、今年の五月、「大堰つ子運動会」が復活し、全学年が運動会で競技を行うことができました。特に、心に残ったことは、五・六年生で取り組んだソーラン節です。先生たちから

「今年は表現で何がしたい。」

と聞かれたときに、

「大堰の伝統だから、ソーラン節は受け継ぎたい。」

という声が上がりました。そこで、六年生と五年生がペアになってソーラン節の練習をしました。私がペアになった五年生は、

「足が痛いしできない。」

ときつそうでした。私は、頑張っしてほしいと思いい「足は曲げなくていいから、腕に力を入れてのばしてみたら。」

と、アドバイスをしました。ゲストティーチャーの方に見てもらい、

「今まで見てきた中で一番いい。」

と褒められて、本番はもつと頑張ろうと思えました。そして本番。最後のポーズを「ヤーツ。」と決めた時、五・六年生の心が一つになった気がしました。

運動会を通して、他学年との絆が深まり、六年生として責任をもつて自分の仕事をやり遂げることができたのでとても嬉しかったです。感染対策をしながらも、全校で運動会ができたことは、楽しく、かけがえのない思い出となりました。

まだまだ、新型コロナウイルスは、私たちの生活を変えていくと思います。それでも、友達との関わりを大事にし、今だからこそできる工夫をしていきたいと思えます。そして、相手を思いやりたり、協力したりしながら、人と人とながらつながることを大切にこれからも過ごしていきたいと思っています。



ふれあいハイキング

大刀洗校区民会議
八波卓也

令和四年十二月二十六日(土)、大刀洗校区のふれあいハイキングが三年ぶりに開催されました。コロナが流行して中止が続きましたが、今年は無事開催することができ、たくさんの方が参加してくれました。参加者は中学生・大人・役員四十三名、児童十九名の合わせて六十二名でした。

ふれあいハイキングの出発式を大刀洗小学校のグラウンドで行いました。

司会進行は、無茶ぶりで四年生三名がすることになったのですが、とても上手に進行していたので頼もしい限りでした。

会長の挨拶から始まり、注意点の説明、最後に副会長の出発の合図「出発！」「児童」進行！でハイキングが始まりました。上高橋、下高橋、高樋、今、鶴木の順番で学校を出発し、目的地の大刀洗公園まで約三・五kmを元気に歩きました。歩いている途中、「車で通る景色とは違うから楽しいね」などの声が聞こえ類笑ましく感じました。

出発から約一時間、目的地の大刀洗公園に到着。休憩する間もなく、すぐに宝探しゲームの説明が始まったのですが、みんなしっかりと聞いていました。説明が終わり、会長の「スタート」の合図と同時にダッシュで宝を探しに行く児童達。一時間歩いてきたとは思えないほど元気に楽しそうに探し、見つけた宝とお菓子を交換してそのまま遊具まで一直線！あつという間に帰る時間となり、遊びすぎて帰りの道のり大丈夫かなと校長先生は心配していましたが、学校まで参加者全員事故もケガもなく到着することができました。子供たちより大人の方が疲れていたような気もしましたが、すぐに到着式が始まり、「今日の感想を言いたい人」と聞くと、一年生三名が元気に手を挙げて「疲れたけど公園で遊べて楽しかった」などと元気に感想を言ってくれました。

最後に区長会長の言葉で締めくくり、参加賞を貰って解散となりました。

来年も多数の参加をお願いするとともに、各種イベントを盛り上げていきましょう。



「芋掘り」を楽しむ

菊池校区民会議
小林美穂

菊池校区健全育成区民会議の事業として、今年度は「歩け歩け大会」と「もぐらうち」を計画しました。一昨年、昨年とも新型コロナウイルスの拡大により「歩け歩け大会」は中止となっていましたが、今年度は二年ぶりに開催することになりました。

当日のスケジュールは、菊池小学校から今村天主堂まで往復し、その後近くの畑で芋掘り体験をする予定でした。しかし、当日は昼前から雨が降る予報がでていましたので、予定を変更し芋掘り体験のみ実施することになりました。時折小雨の降るなか、参加者総勢百四十四名が地区別に分かれ、西大刀洗公民館横の地域の方が育ててくださった「さつまいも畑」まで歩きました。子ども達を中心に芋掘りをはじめると、「でっかい芋があるよ」「たくさんある」「なかなか出てこん」と皆が興奮していました。子ども達は地域の方々から、「上手に芋を掘れたね」と褒めてもらい、泥まみれになりながらも皆笑顔で芋掘りを楽しみました。収穫後は小学校へ戻り、お弁当とお菓子と掘った芋を参加者全員がいただき解散しました。

今回は天候が悪く今村天主堂まで歩くことはできませんでしたが、地域の方々ともども達の交流の場をもつことができ、有意義なひとときが過ごせました。



地域と学校、つながる楽しさ

本郷校区民会議
会長 大野 愛里

「うあー。すこか!!地震つて、恐ろしかね」消火器の水の勢い、すこいね」三角中の使い方、役に立つね。家族にも教えよう」

十月二十二日、「防災教室」を開催し、消防士の方の指導のもと、本郷小学校の駐車場では地震車へ搭乗して震度七の揺れと水消火器による消火器の使用法を、体育館では町の防災士の方による防災啓発動画視聴や講話があり、三角巾を使用した救急処置（包帯法）を学びました。初めての試みでしたが、七十名の参加があり、災害から身を守るための知識と技術を楽しみながら体験できました。

十二月五日に、五年生の総合学習として、かまど・羽釜による炊飯体験をしました。苗づくりに始まり、田植え、稲刈り、昔の道具を使つての脱穀と、米づくりの良さと大変さを体験しての羽釜で炊く御飯は格別で、皆大口をあけて味わっていました。

近年、地球温暖化や気候変動の影響により災害が頻発しています。今年度行つたこれらの事業は、「自分の命は自分で守る」取組の一環で、防災意識の啓発と災害対応力の向上を図る目的でもあります。

「羽釜で御飯」に向けての米づくり、「防災教室」で使用した三角巾の作成等、地域の方々の御協力と御支援に支えられ、見守られながら子ども達は様々な体験を通して育まれています。

「元氣」やる氣をいっぱい詰め込んで、大きく口をあけて笑いながら・語り合いながら、登下校できる日が早く訪れますように。



ふれあいウォーキング大会

大堰校区民会議
永野 修

第二十二回校区ふれあいウォーキング大会を令和四年十月二十九日に開催しました。小学生以下の子ども四十三名、中学生ボランティア十六名、大人七十一名、合計百三十名の参加がありました。

秋晴れの朝、憩いの園大堰交流センターに集合し、開会式の後、小学生と中学生ボランティアは班ごとに、他の参加者はそれぞれに家族、グループごとに出発しました。交通安全協会・子ども見守り隊・消防団の方々に安全面での協力をいただきながら、途中守部区の公民館で休憩をして片の瀬公園に向かいました。

片の瀬公園到着後、小学生は恒例となった宝探しゲームが行われました。番号が書かれた八個の貝を宝にして、見つけたら景品をもらうことができます。子どもたちは、木の根元、遊具の周辺など本当に一生懸命探していました。しばらくすると「見つけた!」という声があちこちから聞こえてきました。

その後、閉会行事を行い憩いの園へと出発、お楽しみ抽選の行われている憩いの園へと帰りました。ウォーキングを楽しんでいる間に、二名の区長さんのご協力をいただいで、抽選が行われています。出発前の受付の際にもらった抽選番号と発表されている当選番号を見比べていました。当選した人は、景品を受け取り嬉しそうに帰っていききました。

開催にご理解とご協力をいただいた地域の皆様にご心より御礼申し上げます。



親子を楽しむ! まなビー講座

『家庭の日』推進事業『親子を楽しむ! まなビー講座』と青少年育成町民会議とのコラボ企画
令和4年度は、5回の講座を開催しました。

第1回 「真夏の夜の大冒険?夜のドリームセンター体験」

令和4年7月23日(土)開催

開始時間よりも早めに参加者全8組がそろったため、予定よりも少し早めに講座を開始。

まず『懐中電灯の安全な使い方』をみんなで確認し、引き続き100円ショップなどで手に入るプラスチック製のボトルをケースとして活用した『防災セット』を紹介。

中身もほとんどが100円ショップなどで手に入るもので、アルミのブランケットや携帯トイレ、水をかけると膨らむ不織布のタオル、使わなくなった古い眼鏡など、大人も子どもも中身に興味津々でした。

その後、全館消灯した大刀洗ドリームセンターの中を、事前に軽く下見をした経路に沿って、一組ずつ探検して行きました。

夏だったため『真っ暗闇を探検』とは行きませんでした。暗い中で気づきづらいことや段差の危険性など、災害時に気を付けるべき点について、実際に身をもって感じてもらえたようです。

毎月第三日曜日

家庭の日

家庭の日(毎月第三日曜日)には

- 家族みんなが顔をそろえよう
- 子どもの意見や考えを聞くようにしよう
- 家族みんなでスポーツやレクリエーションをしよう
- 家庭を離れている家族と連絡を取りあおう
- 子どものしつけや方法について考えよう





第2回 「たまには親子でボードゲームしよっか!」

令和4年8月11日(木) 祝日開催

親子4組・10名での講座でした。

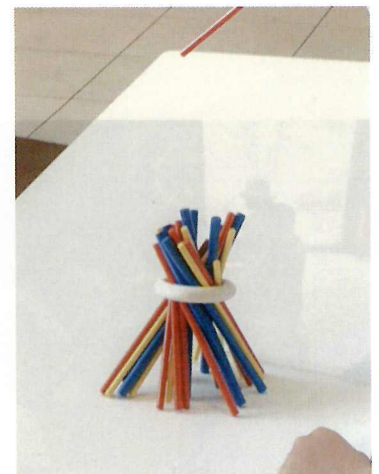
まずは親子で『ダイスバトル』をプレイしました。サイコロがあればできる簡単なゲームでしたが、想像以上に盛り上がり親子での対戦を楽しんでいました。

その後は、一般に販売しているボードゲームを体験。

『ナインマイル』は、カードの両面に描かれた絵をお題の通りに並べ替えるゲームで、思い通りに揃わずみんな悪戦苦闘!

最後に『スティッキー』という、木の輪っかで束ねた絶妙なバランスで立つ複数の棒を、倒さないように一本ずつ抜いていくというゲームをプレイ。

参加者全員がお互いに協力し合い、応援し合って、終始笑顔の講座でした。



第3回 「リバーカヤックと木工体験」

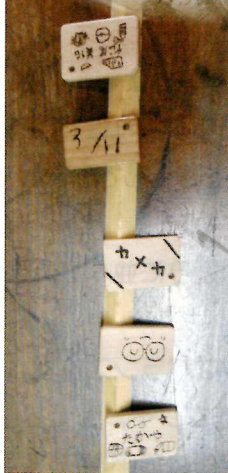
令和4年9月11日(日)開催

場所：和水江田川カヌー・キャンプ場(熊本県玉名郡和水町)

肥後民家村、江田船山古墳

- 内容：1 カヌー体験(1時間)
- 2 木のキーホルダー作り(約1時間)
- 3 周辺散策

成果：自然体験により、子どもたちの探究心・自主性などが芽生えるとともに、自然の摂理を学び、大きく成長した1日になりました。また、親子共通の体験が会話を弾ませ、終始笑顔で親子の絆も深まりました。



(15)

第4回

「親子で楽しく！多肉植物はじめての寄せ植え」

令和4年10月22日(土)開催

昨年度一度企画したものの、一旦は開催を断念した講座ですが、今年度も引き続き福岡県緑化センターの協力を得て、講師を派遣いただき実現しました。

今回は親子7組・17名での講座でした。

参加者はみなさん、講座の最初からとても熱心に講師のお話しに耳を傾けて、しっかり集中！

参加者の中には小さなお子さんもいましたが、普段目にする木や草花とはまた少し違った形の多肉植物に興味津々といった様子で、飽きることなく静かに参加していました。

講師の吉松先生のお話はとても分かりやすく、ほめ上手で、皆さんの疑問にも丁寧に答えていただきました。

寄せ植えのやり方、気を付ける点、育て方や増やし方など、ポイントをしっかりと教えていただき、うまく育てられるだろうかという不安も帰るころにはしっかり解消されました。

吉松先生の植物への愛情がしっかりと伝わって来る、とても癒される講座でした。



第5回

「食べて学ぶ！チョコレートのお話」

令和4年12月18日(日)開催

今年初めての積雪の中、欠席もなく8組の親子の参加がありました。

最初に、チョコレートの材料や作り方、ビター・ミルク・ホワイトの違い、チョコレートが溶ける秘密、フェアトレードについてなどを解説。実際に「カカオ豆」や「カカオバター」も手に取って見てもらいました。

途中少し難しい話も出ましたが、低学年の子どもさんも静かに最後まで聞いてくれました。

参加者が一番楽しみにしていた試食の時間は、親子でワイワイと味について意見を交わしながら食べていただきました。皆さん笑顔で話も弾み、とても楽しそうでした。

スーパーやコンビニで買えるチョコレート、冬季にだけ販売されるオーガニック&フェアトレードのチョコレート、シンプルな素材の味が感じられるプロ用の製菓用チョコレートの3種類を、ホワイト・ミルク・ビターの味別に食べ比べてもらいました。

皆さんそれぞれに好きな味が違って、甘いホワイトチョコレートが好きな方、ビターなチョコレートが好きな方など様々で、味覚の違いは面白いなと感じました。参加者からは、楽しかった、美味しかったの声をたくさん聞くことができ、開催して良かったと改めて感じました。



その他 「育成通信」

新しい試みで、小学生を対象に、親子で読んでいただきたい「育成通信」を年4回発行しました。今年度は、自然体験の特集です。

第1号 テーマ「自然体験が育む生きる力」 令和4年7月13日発行

【第1号表面】



育成通信

～「自然体験編」その1～

◆テーマ/ 自然体験が育む「生きる力」

子どもの頃の自然体験が引き起こす効果「生きる力」!

みなさん子どもにとって、水遊び、ハイキング、昆虫採集やキャンプなど、**自然の中で体を思いきり動かす感動体験**は、普段の生活では味わえない貴重な時間です。

ゲーム機などが無い昔の子も達は、放課後や休日に野山を駆け回り、昆虫採集をしたり、秘密基地を作って遊んだり、思いきり体を動かして遊んでいました。

しかし、現代のみなさんは、遊べる場所が限られたり、習い事や塾が忙しく、体を動かして遊ぶ機会が減っています。それに、ここ数年のコロナ禍に加え、ゲームやスマートフォンなど、屋内で遊べるものが充実しているのも外遊びが少なくなっている原因かもしれません。

自然の中で体を動かす体験は、様々な力を育む良い機会となります。ある大学の教授が小学4～6年生を対象に行なった調査によると、自然体験活動をたくさん経験した子どもには、**課題解決能力や豊かな人間性など「生きる力」**が備わっているそうです。

また、自然体験活動をたくさん行なったグループほど、「わからないことは、そのままにしないで調べることが多い」、「誰とでも協力してグループ活動ができる」、「相手の立場になって考えることができる」の項目に「当てはまる」ことが多く、自然体験活動を行なわなかったグループほど、それらが「当てはまらない」ことが多いという結果が出ています。

自然体験活動をたくさん経験した子どもには、課題解決能力や豊かな人間性など「生きる力」が備わっている!

では、その「生きる力」とは、どのような力なのでしょうか。

- 自然に親しみ、理解する
- 環境に対する意識を持ち、生命の大切さを知る
- 想像力
- 発想力
- 表現力
- 豊かな心、感謝の心を持つ
- 感性や知的好奇心が育まれる
- 探究心が芽生える
- 自主性が芽生える
- 協調性、コミュニケーション力
- 健康で丈夫な体
- 情緒の安定

たとえば、自然の中で見つけた葉、枝、石などで「どんな遊びができるのか」を考えることで、**発想力や想像力が養われます**。

また、生き物に触れることで**生命の大切さ**を知ったり、土や水に直接触れて遊ぶことで、**健康で丈夫な体や情緒の安定**が身につくそうです。

自然体験は、みなさんの心身にとっても良い影響を与えるみたいですよ!

第2号 テーマ「野外の危険な生き物」

令和4年9月20日発行

第3号 テーマ「ロープやひもの結び方」

令和4年12月5日発行

第4号 テーマ「飯ごう炊さん」

令和5年3月1日発行

【編集委員長】		【編集委員】	
事務局	事務局	大堰校区	本郷校区
原 榎	久保山 亜聖	大堰校区	本郷校区
勝 美	小林 美穂	大堰校区	本郷校区
	南 健吾	大堰校区	本郷校区
	山田 真由美	大堰校区	本郷校区
	辻 啓子	大堰校区	本郷校区
	佐田 麻由美	大堰校区	本郷校区
	永野 修	大堰校区	本郷校区
	八波 卓也	大堰校区	本郷校区

今年度も開催できなかった行事はいろいろありますが、来年度こそは各団体の役員や地域の皆様と力を合わせて、子ども達と楽しく開催できるとを願っております。(八波 卓也)

編集後記

今年度もコロナ禍の中、各種行事等の準備 開催お疲れさまでした。開催できた行事、開催直前までの準備後にやむを得ず中止になってしまった行事など多々ありましたが、来年に繋がることは間違いありません。

特に、三年ぶりに開催された「少年の主張」は、言葉だけで伝える難しい弁論を大人顔負けの内容・表現力、そしてそれぞれ自分の言葉に強弱をつけながら主張できており、本当に感心しました。

今年度も開催できなかった行事はいろいろありますが、来年度こそは各団体の役員や地域の皆様と力を合わせて、子ども達と楽しく開催できるとを願っております。(八波 卓也)